

平成 21 年 6 月 2 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19520644
 研究課題名（和文） 17世紀スイスのカトリシズムと民衆文化に関する社会史的研究
 研究課題名（英文） Catholicism and Popular Culture in the seventeenth-century
 Switzerland: A social History
 研究代表者
 踊 共二（ODORI TOMOJI）
 武蔵大学・人文学部・教授
 研究者番号：20201999

研究成果の概要：

本研究では、スイス、ルツェルン山岳部の古い民間信仰の世界（亡霊・ドラゴン・地の精・占い・魔術など）に関する資料を現地で収集、その宗教世界の細部を検証し、それらが 16～17 世紀の体制教会による教義の統一化（宗派化）の時代をくぐり抜け、啓蒙の時代（18 世紀）の科学者たちの批判にも耐え、19 世紀、ロマン主義の時代に息を吹き返し、20 世紀には国際情勢（第二次大戦期のドイツとの対立）による方言の再評価（標準ドイツ語への反感と郷土の古い言語の見直し）とも結びつき、宗教性を失った伝説の形で継承されてきたことを明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：近世 スイス ドイツ 宗教改革 宗派化 民衆文化 社会的規律化

1. 研究開始当初の背景

西洋近世史の研究においては近年ますます民俗学の成果がとり入れられるようになってきているが、成立時期が不明の史料が用いられることも多く、研究の不確かさが難点となっているが、スイスとりわけルツェルン地方には 16 世紀から 17 世紀にかけて都市の知識人が同時代の農村で口承の伝説を採取

して記録に残し、民衆の宗教のありかたを实地で調査して分析した結果を書きとめる活動をしており、他の地域にはない詳しい文献資料が存在するため、そうした信頼できる史料を用い、かつ当時の行政機関や裁判所の記録なども援用しながら、社会史的・民俗学的な歴史研究を試みようと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近世ヨーロッパにおける民衆文化・民衆宗教を社会史的方法によって再現することであり、宗教改革以後の厳格な宗派主義やその後の啓蒙・合理主義によっても変わらなかった西洋文化の古層ないし基層を明らかにすることである。

具体的な調査の対象は、民俗資料の豊富なスイス、ルツェルン地方である。

3. 研究の方法

西欧の民俗学および歴史学においては、キリスト教信仰の確立に先立つゲルマン古代やケルト時代の文化的古層に関心が寄せられ、祝祭・農耕儀礼・冠婚葬祭などの習俗や各種の伝説など、幾多の事例が示されてきた。ただし、19世紀のロマン主義的民俗研究において「非常に古い時代にさかのぼる」と見なされていたものが、たとえばドイツの多くの「民謡 *Volkslieder*」のように、実は新しい形成物であることがその後の検証作業で明らかになったケースも多い。歴史研究の視点と方法が欠けていると批判されてきた民俗学者たちは、とくに第二次大戦後、神話や伝説集や文学作品だけではなく、歴史家たちの使う古文書群にも取り組んで歴史的な民衆文化論や民俗宗教論を展開するようになる。その後半世紀をへて歴史学（社会史的研究）との境界はほとんどなくなりつつある。こうした研究のなかでおもに扱われているのは、およそ1500年以降のことである。というのも、近世の入り口にあたる16世紀は中央集権国家の胎動の時代であり、地方社会を掌握して「規律化」しようとする中央政府と在地の中間権力との間の交渉が増え、民衆の生活世界や精神世界の具体相や個別の事件に触れた裁判記録や行政文書、会議録、会計簿、その他書記官が残す各種の公式記録が豊富に出

現する時代だからである。また16世紀は宗教改革および「宗派化」の始まりの時代であり、カトリック教会と各種のプロテスタント系の教会が競って民衆教化につとめ、異端的信仰や異教的習俗を駆逐する組織的活動（宗教裁判等）を行う過程で大量の文字資料を生み出す時代だからでもある。

本研究は、1500年頃の民衆世界において公権力の担い手や正統宗教の擁護者たちが警戒の目を向けていた前キリスト教的習俗や世界観がどのような形で残存していたかをアルプスの山岳地帯の事例をもとに示し、その残存の理由の明らかにする試みである。

本研究においてとくに注目するのは、近世スイスの都市ルツェルンの当局者（書記官）レンヴァルト・ツイザート（Renward Cysat, 1545-1614）なる人物であり、彼が同時代人への聴き取りや実地調査によって記録したスイス（アルプス）山岳農民の宗教世界である。彼はスイス民俗学の創始者と見なされている。その一家はイタリアのミラーノからの移民チェザーティ（Cesati）家に発する。父親は商業を営んでいたが、レンヴァルトが少年のころに死去した（1549年）。レンヴァルトはラテン語学校に通い、自由七科の初歩段階の手ほどきを受けていたが、おそらく経済的事情も影響して大学には進学せず、1559年に薬剤師の修業を開始した。その後彼は、薬局を営みつつ独学で歴史や自然誌や医学関係の書物を読み、多くの学者たちと書簡を交わしている。1570年には都市の官職に就く（下級書記官）。都市の古文書を自由に閲覧できたこともあって、彼は郷土の地誌や自然誌、博物誌の研究にとりくむことができた。

4. 研究成果

（1）16世紀の都市ルツェルン

レンヴァルト・ツイザートの時代の都市ル

ツェルンは、トリエント公会議の理念に従ったカトリック改革の一大拠点であり、指導的な聖職者たちと為政者（都市当局）は手を携えて教区司祭・修道士の綱紀肅正をはかり、民衆世界の迷信と不道德を矯正して「正しい信仰」を確立しようとしていた。ツィザート自身、1573年から市参事会員として、75年以降は市書記官として教会と社会の改革に尽力していた。ルツェルンで起こっていたのは、ヨーロッパの随所で確認される「宗派化」と「社会的規律化」の動きである。

（2）山岳農民の宗教世界

当時の都市の書記官には外交官の役割もあり、ツィザートはイタリアやフランスやドイツ諸邦にしばしば旅をした。彼は各地の宗教行事や民衆の習俗をじかに目にし、驚嘆の思いでそれらを記録にとどめている。もちろんルツェルン周辺の農村地帯にも頻繁に公用で足を運び、彼自身で、また部下を使って土地の伝説や迷信に関する聴き取り調査を行った。コンスタンツ司教代理がルツェルン農村部を巡察したさいにも同行している（1576年）。農村の習俗や信仰について記録するさいにツィザートは、聞き取った内容を忠実に再現するだけでなく、必要に応じて古典古代以来の博物誌や歴史書、同時代の学術書や文芸作品を参照し、古今の類似の現象を紹介しており、その射程はアフリカやアジアに及ぶ。なおツィザートは、奇跡信仰については慎重に扱っており、その信憑性については神学者の判断に委ねる姿勢をとっている（ただし、あまりに非キリスト教的と思われる場合は、ただちに迷信と断定している）。ツィザートは、彼自身が作成したさまざまな文書（手稿）を1570年に合本にし、『ルツェルンおよびスイスの年代記・事物誌集成』というタイトルをつけた。内容的には「民俗誌」と呼んでよいものである。その他にも17世

紀前半まで彼がつけていた各種の記録が（現在では翻刻版で）利用できる。以下、それらの豊富な材料のなかから、近世スイスの山岳農民の宗教世界を鮮やかによみがえらせてくれる記録を1つだけ記しておく（本研究の実際の調査は数十項目にわたる）。

死者の軍勢：闇夜に行く奇怪な「死者の軍勢」（wildes Heer/ wütendes Heer）ないし「荒ぶる狩人」（wilde Jagd）の伝説はヨーロッパに広く見られる。その先頭に行く魔王は、フランスではエルカン（Hellequin）と呼ばれた。イタリアではアルレッキーノ（Arlecchino）であり、その不気味なイメージは仮面劇の道化の姿に受け継がれていった。イギリスやアイルランドのワイルドハントも同じ系譜に属する。スイス人ツィザートは、以下に引用するようにグーティンスヘールないしヴーティンスヘールといったスイス独特の呼び名を使っている。「一般大衆によってグーティンスヘール（Guot tjns heer）ないし死者の軍勢とよばれている、闇夜にさまようたぐいまれな亡霊について。この亡霊はヴーティンスヘール（Wuot jns heer）と呼ぶ方が正しい。これはしかるべき最期にいたる前に命を失った人間、つまり自然な死に方をしなかった人間たちの魂のことである。かくして彼らは、その後に往生を達成できるまで、死んでもなお地上をさまよわねばならず、互に行列を組んであちこちを歩くのである。彼らはみな、どのようにして命を落としたかが分かるような目印をつけている。たとえば武器で殺害されたものはそれに対応する目印をつけているのである。そしてつねに死者のなかのひとりが行列を先導し、「道を空けよ！ 死者が通る」と叫んでいる」。「死者の軍勢」（wildes Heer/Wuotisheer）の語源は定かではないが、グリムはこれをゲルマン人の戦の神ヴォータン（オーディン）と関連づけており、この

説をとる歴史家は今も多い。ヴォータンはヴァルキュリアが選んだ戦死者たちの魂を彼の宮殿ヴァルハラ (Walhalla) に集めるのだから、死神のイメージをもっている。ヴォータンはキリスト教時代になっても「死者の軍勢」の先導者として民衆の意識のなかで、そして口承のなかで生き続けたという。タキトゥスの『ゲルマニア』43章には闇夜を選んで行軍する「幽霊のごとき軍隊」の姿が描かれているが、中近世ヨーロッパの「死者の軍勢」はこうしたゲルマン古代の戦士のイメージとも関連していたと考えられている。なお中世以降の伝承において「死者の軍勢」は、不慮の死を遂げた人や洗礼を受けられずに死んだ子どもの亡霊として説明されることが多い。出現の時期はとくに十二夜すなわちクリスマスから公現日 (1月6日) までである。ここには、キリスト教化された (ないしキリスト教的に加工された) 古代宗教の神と死霊の姿が垣間見える。

(4) 小括

「社会的規律化」や「宗派化」(異質な信仰の排除) は、「脱魔術化」を伴いながら、「中心」から「周辺部」へ、言い換えれば都市世界から農村世界に広がる波動として理解されてきた。しかしながら、レンヴァルト・ツイザートの民俗誌からは、近世の都市エリートもまた、農村的なるもの、つまり前キリスト教的な宗教世界に由来する幾多の俗信と内面的に切り離されてはいなかったことがわかる。このことが「規律化」や「宗派化」の進行を内側から妨げる要因になりえたことは明らかであろう。

近世における都市民と農村住民の心性の違いを強調しすぎるのは危険である。近世都市は平均的に規模が小さく、周囲は多くの場合、暗い森や荒地や山岳であり、すぐそばに川があり、湖があり、また沼地があったこ

とを想起したい。市壁の内側と外側は、法や身分の壁があったにせよ経済的・政治的には密着していた。農民たちは良い天候と豊作を願うなかで呪術的世界に生きていたと言われるが、良い天候や豊作への願いは農村部を食糧供給源としていた都市民にも共有されていたのであり、両者の間に精神世界における絆が確認できたとしても、それはむしろ当然のことである。アルプス地方の冷害や雹害は都市民も農村住民も無関係に襲ったのであり、農民たちの不幸は都市民の不幸でもあった。イギリスのフォークロア研究者シンプソンは、キリスト教神学および教会が対応してくれない (教会にとっては低次元の) 現世的・日常的な幸と不幸を統御する中間的存在 (妖精) や呪術を許容するのが民間信仰の特徴であると述べ、さらに民衆世界の伝説には「自分の住むかけがえのない土地にたいする農民たちのプライド」が反映されているとも論じている。古代世界の精霊や自然神が、キリスト教によって悪魔視されながらも民間信仰における妖精や亡霊の姿で命脈を保ったことは、ヤーコプ・グリムの時代から多くの研究者が指摘してきたところであり、柳田國男が日本の「おばけ」を「上代信仰の零落した末期現象」と呼んだのも、西欧の民俗学や口承文芸研究の成果を吸収したうえでのことであった。アルプス地方に関してもこれとまったく同じことが言えるであろう。

(5) 伝説の誕生と継承

上記の項目に沿って挙げられている原史料は多岐に及び、その収集や閲覧・調査や短期間ではできないが、たとえばスイス盟約者団会議事録のように、利用しやすいものもある。その第4巻 (1533年から1540年までの議事録。ルツェルンで1878年に刊行) には気象をめぐる迷信的慣行のありさまが記録されている。しかし、この慣習の起源をた

どることは難しい。そもそも雨乞いや好天を祈る習俗は古代にさかのぼる。

一方、ルツェルンのドラゴンの伝説・竜の石の治癒力を信じる迷信については、上記の書誌を追うと、その起源がわかる。この伝説と迷信は6～7世紀の隠者の伝説に溯り、16世紀にディーボルト・シリング（年代記作者）やレンヴァルト・ツィザート（書記官）、コンラート・ゲスナー（博物学者）によって人口に膾炙するようになった。17世紀にも、ツィザート家から出た学者ヨハン・レオポルト・ツィザートがフィアヴァルトシュテッテ湖の地誌を記した書物のなかでドラゴン伝説を詳しく記して継承した。バーゼルやチューリヒの文筆家たちもその物語を普及させるのに一役買っていた。たとえばチューリヒのヨハン・ヤコブス・ヴァグナーやヴァルトロメウス・アンホルンである。

結論と展望（現代への視点）

啓蒙の時代、つまり理性の時代の知識人たちは、自然科学の視点でそれらを学問的検討の俎上に載せ、迷信に満ちた民衆を教導しようとした。ドラゴンの伝説と迷信の批判者としては、1700年代の半ばに文筆活動を展開したチューリヒの医師・自然学者ヨハン・ヤーコプ・ショイヒツァーが重要である。ルツェルンでも医師アントン・カッペラーのようにドラゴンや幽霊の実在性を否定する論文を書く学者が現れていた。彼らの著作は、カトリックの宗派化の時代、16世紀にイエズス会士たちが推進した迷信の批判の延長上にあった。しかし、アルプス世界の習俗に共感をもって接する態度は、医師や自然学者たちの世界にも見られた。19世紀になると、ルツェルンの竜の石は自然科学者による岩石の成分研究の対象となり、多くの学術論文が書かれた。一方、ロマン主義の思潮のなか、また機械文明に対する嫌悪感が生まれるなか、

古き良き時代を懐かしむ文筆家や民俗研究者たちの仕事が脚光を浴びるようになり、アルプス世界の伝説を収集・紹介する活動が盛んになる。C・コールルツシュが口承および手書き史料によって集めた伝説集を編んだのは1854年のことであるが、そこには当然のことながら、洞穴に住む伝説のドラゴンについての記述がある。

19世紀のアルプス世界の民俗研究としてもっとも重要なのは、すでにたびたび引用しているリュートルフの伝説集（1865年）であろう。そこには啓蒙の時代の否定的民衆観はない。むしろ失われた世界への望郷の心であり、それを保存しようとする意志である。リュートルフはレンヴァルト・ツィザートの民俗誌に多くを負っており、ツィザートが「スイス民俗学の創始者」と称されるのは、19世紀の口承文芸研究者たちへの大きさ故のことである。20世紀になっても21世紀になっても伝説の世界は生きている。20世紀においては、工業化と自然環境の破壊を背景とした自然回帰の思想や、隣国ドイツとの緊張関係（第二次世界大戦）を経て強まったドイツ語圏スイス方言（スイスドイツ語）の再評価の動きとの連関が注目される。方言の再評価については、60年代以降の若者の反権威主義や、その後の排外的スイス愛国主義との関係も指摘されている。ともあれ1970年代以降、テレビやラジオ等のメディアの世界では方言が力を増している（天気予報がとくにそうである）。一部の言語学者が言うように、世界の言語をハイパー中心言語（世界の共通言語）・スーパー中心言語（世界的に通用範囲の広い言語）・中心言語（国家語）・周辺言語に分けるとして、スイス全土において（外国語である）英語がハイパー中心言語化していくなかで、スーパー中心言語ないし中心言語としての標準ドイツ語は重要性（使用の頻

度)を低下させ、狭い地域内でのコミュニケーションに用いる周辺言語(および、それよりさらに細分化した方言)としてのスイスドイツ語がかえって重要性を増しているという事実も看過できない。

方言の再評価の流れは、民間放送局や地方局の林立とも関係している。ベルンやバーゼルの地方放送局に標準ドイツ語は不釣り合いなのである。アルプス世界の古い伝説の世界は、新しいメディアのなかで復活と継承を繰り返している。出版の世界も同じである。たとえばハンス・シュリーバーの『方言で語るピラトゥス伝説』(1986年)には、ピラトゥスとリギをのぞむ湖畔と高原の世界で話されてきた日常語によって、お馴染みの物語が記されている。

アルプスの民衆宗教の世界は16世紀の体制教会による「宗派化」の時代をくぐり抜け、17~18世紀、啓蒙の時代における科学者の批判の中でも生き延び、19世紀、ロマン主義の時代に息を吹き返し、20世紀の国際情勢(ドイツとの対立)、青年層の反権威主義、排外的な愛国主義、メディアの地方的拡散等による方言の再評価、エコロジー思想の広まり等と結びつきながら、宗教性を失った伝説の形で受け継がれ、今日に至るのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

- (1) 踊 共二「生き残る太古の信仰：ある近世人の心象風景」『創文』(査読なし) 505号、2007年、36-39頁
- (2) 踊 共二「近世ヨーロッパの諸宗派とユダヤ教」『歴史学研究』(査読あり) 833号、2007年、188-197頁
- (3) 踊 共二「スイス山岳農民の信仰世界：レンヴァルト・ツィザートの民俗誌から」『武蔵大学総合研究所紀要』(査読なし) 17号、2008年、15-29頁。

- (4) 踊 共二「宗教改革と日本人」『歴史と地理(世界史の研究)』(査読なし) 219号、2009年、39-43頁

[学会発表](計2件)

- (1) 踊 共二「スイス山岳農民の信仰世界：レンヴァルト・ツィザートの民俗誌から」、教会と社会研究会、2007年12月22日、於：東京大学
- (2) 踊 共二「宗教改革急進派：その起源と宗派化の諸相」、日本女子大学文学部文学研究科主催シンポジウム：ヨーロッパ宗教改革の連帯と断絶、2008年11月29日、於：日本女子大学

[図書](計2件)

- (1) 森田安一、踊 共二(編)、山川出版社、『ヨーロッパ読本 スイス』、2007年、総頁数：263頁
- (2) 森田安一(編)、教文館、『ヨーロッパ宗教改革の連帯と断絶』、2009年(総頁数328頁)第2章：踊 共二「宗教改革急進派：その起源と宗派化の諸相」、41-54頁

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

[その他]

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

踊 共二(ODORI TOMOJI)
武蔵大学・人文学部・教授
研究者番号：20201999

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし